

Interview 世の中の挑戦者たち

ここで紹介するのは、現状に満足せず、新しい時代を切り開こうと奮闘する挑戦者。常に高みを目指し、挑戦を恐れない姿勢、そして信念を表現するための強い意志を持ち続けられる理由を伺い、仕事のスタイルに活かせるヒントを探る。

世の母のために社会を動かす活動に邁進する挑戦者

中橋恵美子

小さなことでもいい、まずは成功体験を
社会と関わる喜びは、そこから生まれる



Emiko Nakahashi

1968年香川県生まれ。88年に四国学院短期大学卒業後、大成建設入社。93年に退社し、柔道家の夫と結婚。夫の仕事の関係で茨城県つくば市へ引越し、慣れない土地で孤独を感じながら子育てをし、地域のネットワークの大切さを知る。香川県に戻り、その経験から、98年NPO法人わははネットを立ち上げ、理事長に、2006年より全国子育てタクシ―協会事務局長を兼任する。中2、中1、小学3年生の3児の母。

明るい人である。ケラケラというよりガハハと笑い、周りの気分を盛り上げる。自然にそういう振る舞いができる人。そういうえば80年代、いわゆるバブルの頃には、どこにでもいた。今は、珍しい。

「そら、かなりイケイケでしたよ。時代がそうだったのか、私がおもそもそという性格なのか分かりませんが、日々を謳歌してる実感はありました。ところがね、子供を生んで子育てが始まって、様子

が一変したんです。突然、社会から切り離されたような孤独感。家以外の予定がない、スケジュール帳を持つ必要がない、そのうち今日が何曜日なのかも分からなくなってくる。

もちろん子育てはとても重要な仕事ですし、他の何にも代えられない満足感や喜びはあります。けれども、社会と隔離されるというか、子供と夫以外は誰も私の存在に気づいてくれないんじゃないかと思うと、辛かったです。

私、ここにおるんよ。誰か見て！ そんな気持ちで、同じ境遇の友たちを作って、何かしようという行動につながりました。子育てサークルはどうかしらとか、次は私たちの情報誌を作りましょうよとか、ね。そんなふうにした活動が、徐々に広がって大きくなったというわけです」

現在、中橋さん率いるNPO法人、わははネットは、情報誌の発行、母親の交流広場の運営、夕食の献立をメルマガでケイタイに配信、そして子育てタクシ―の普及などの活動を、企業からの協賛金や広告収入によって行っている。

「情報誌創刊のためにみんなでお金を持ち寄って、印刷屋さんには掛け合って交渉してる時に、君たちの世代にしては、珍しいねって、その社長さんに言われことを思い出します。

団塊の世代として生きてきたその社長さんは、毎日のように世の中が変わるのを見てきたそうです。テレビのない家にテレビが来て、白黒がカラーになって。砂利道がどんどん舗装されていって。だから自分たちは世の中を変えられると思っただし、実際、学生運動にも燃えた。



けれど、十分に出来上がった社会に生まれてきた私たちの世代は、変わることを知らないし、ましてや自分が世の中を変えられるだなんて思っていないおとなしい人たちの世代だろうという印象だったんですね」

団塊の世代がおとなしいと感じる中橋さんの世代ではあるが、それでも百花繚乱のバブルを知っている。現代の社会の若き担い手たちは、それさえも知らない、さらにおとなしい世代というわけか。

「いや、本質的には変わらないと思います。だって私らだって、おとなしくて何もできないと思われていたけど、こうやって色んなことができて。」

ただ、世代が若くなるにつれて、成功体験が少ない傾向はあると感じます。若さゆえではなく、自分から行動を起こさないように見えます。積極的に自分から社会に関わらなくても済んでしまうのから。でも、自分の行動で何かが変わることの喜びは、ぜひ知って欲しいです」

小さなことで、いい。中橋さんの場合、スーパードットのご意見箱に投書したアイデアが採用されたことが、自ら社会に積極的に関わっていききっかけになった。

「誰かに話したくなるほど、すごく嬉しくてね。言えは変わるんや、行動すれば世の中って動くんやっていうことを経験すれば、社会に関わっていくことの楽しさは感じるはずだし、逆に社会と関わらないという状況がどれだけ空虚な生き方なのか、身にしてみると思います」

まずは身近なことへの関心と行動を。中橋さん流の社会との関わり方、そこから真似てもいいかもしれないと思った。